

女将の誕生

—新聞・雑誌記事にみる旅館の女性像—

後 藤 知 美 *

GOTO Tomomi

The Birth of the Okami

How Newspapers and Magazines Have Described Women in the Inn

This study discusses the image of *okami* who (i) has a backbone to manage inns by themselves, (ii) feasts guests with warm hospitality, and (iii) has a good grounding in Japanese traditional culture, especially about causes and processes of its establishment, based on newspapers and magazines. In the fields of conventional folklore, women tended to be discussed in relation to home and local community. However, this study newly set the above-mentioned issues in the view of the women image in the society. It was found that the image of “*okami*” was shaped as a result of various situations that Japanese inns faced in each period, and finally was used as a strategy to survive intense competition in the field of inn business. The media played a crucial role not only for shaping the image of “*okami*” but for actual lives of *okami* themselves.

キーワード：旅館 女将 メディア 多層的な女性の在り方

* 筑波大学人文社会科学研究科

はじめに

最初に、一つの事例の紹介から始めたい。1960年代中頃のことである。山陰地方の旅館の跡取り娘（以降、Aさんと呼ぶ）が、実家の旅館を継ぐために東京の短期大学に進学し、サービス論について専門的に学んだ。卒業後、料理が好きだった彼女は、実家の旅館の料理をもっと質の高いものにしたいという目標を抱き地元に戻った。旅館で調理を担当するのは板前であったが、調理場で板前を手伝い、利用客に美味しい料理を提供しようと考えたのである。だが、この願いが叶うことはなかった。働きはじめると従業員や利用客から、調理場で働くAさんへ不満が寄せられた。

従業員たちは彼女に、旅館を采配するなら接客をしてほしいと不平を言った。利用客からは、「女将」として客に顔を見せてほしいという要望が寄せられ、Aさんは仕方なく接客の最前線に出ざるを得なくなった。この思い出を、彼女は「旅館のおかみさん」と言ったら細うで繁盛記みたいな「女将」さんをみんなが想像して、料理をするおかみさんは「女将」さんじゃなかった」と語る。

「細うで繁盛記」⁽¹⁾は、1970年1月から1971年4月まで日本テレビ系列で放送されたドラマである。料亭の娘として生まれた主人公が老舗旅館に嫁入りし、周囲の妨害にも負けず、新しいアイデアと温かい心遣いで嫁ぎ先を大旅館に成長させるという内容であった。筆者による旅館の女性への聞き取り調査でもこのドラマについて言及する話者は多く、その影響力がうかがえた。

Aさんが目標としていたのは美味しい料理で客をもてなすおかみであったが、客・従業員側から求められたのは、従業員を指揮し客をもてなす「女将」であった。テレビドラマ等、メディアの情報から「旅館の女将像」について先入観をもっていた利用客が、そしてAさんと共に働く従業員さえも、自らが思い描く「女将」が提供されないことに不満を感じたのだろう。彼女はこの不満を解消するために、自らの働き方を変えざるを得なかったのである。

では、彼女の働き方を変えてしまった「女将」像はいったいどういうものであったのか。いつの時期から、どのように形成されていったものなのだろうか。本稿ではこの、メディアによって形成されていった「女将」像とその時代的変遷を明らかにする。

1. メディアが創る「民俗学的」女性像

(1) 社会における女性への着目

民俗学においては、女性の役割が常に家と関連付けられて語られてきた。だが1990年代頃から、初期の民俗学における女性の描かれ方を再検討する試みが盛んになされ、従来の民俗学的女性観の限界が指摘された〔中込1990; 倉石1996; 日本民俗学会1994〕。

さりとて、新たな研究の展開が不十分なままであることは否めない。ここで注目したいのが、福田アジオの示唆する、女性と社会との接点という視点である。福田は、柳田國男が特に重視した「主婦」役割について柳田自身の女性への期待を反映したものと批判する一方で、主婦の権能の中に「客を接待する役割」があったことに注目し、柳田が、かつての女性が家の社交において

重要な役割を果たしていたと述べていることを指摘した。柳田は、主婦が非社会的存在へと変化したのは、その権能が縮小した結果だと見なしていたのである。福田によれば、これは「家の中にのみ閉じこもって家庭外の人々との接触をほとんどしなかったという常識を否定」するものであり、「主婦の社会性」を示すものであった〔福田 1992〕。

福田の示唆するこの視点に注目する研究がなかったわけではない。鶴理恵子は、農家女性の労働が無償から有償へ転換したことが、女性自身の認識や地域共同体・家族関係に与える影響について検討している〔鶴 2003; 2007〕。彼女の論考に登場するのは、既存の共同体との緊張関係や葛藤を潜り抜け、家を超えた繋がりを作り出し新たな試みに挑戦する女性である。また、谷口陽子は、山口県矢玉地区の女中奉公について調査し、女性たちが家・地域を離れ獲得した経験やネットワークが、地域社会や家の中でどう活かされているかを考察している〔谷口 2008〕。鶴・谷口の両者とも、家における役割を果たそうとした女性たちが、結果的に家を超えた世界においても活躍する姿を描いているのである。しかし、こうした試みは緒についたばかりであり、新たな民俗学的女性像の提示に向け、今後一層の展開が期待される視座だと考えられる。

（2）メディアとの葛藤

限定された地域社会ではなく、より広い次元と民俗の結節点に注目するのは女性研究に限った潮流ではない。これまでの民俗学では、家の連合が村であり、村は人々の生産・生活の単位として一定の明確な領域を持つ〔湯川 2008〕重要な枠組みとされてきた。しかし、近年、現代の民俗事象をとらえるうえで、家・村のみを分析の枠組みに適用することについての問いが提示されている。

門田岳久は、現代日本の巡礼ツーリズムの成立と展開を論じる中で、空間的に境界づけられた地域共同体を記述の外延として設置することの不十分さを指摘している〔門田 2010〕。門田は、現代社会においては、民俗学が対象としてきた「日常生活」における「文化」が、国家や市場というマクロな文脈に影響を受けていることを指摘し、「文化」と「マクロな文脈」の接触領域を包括的に記述しなければ、現代民俗学が現代的となることはない、と主張する。

現代社会の日常生活を取り囲む「マクロな文脈」の一つとして「メディア」がある。メディアという場合は、人々の「日常生活」を位置づける「マクロな文脈」の一つでもあり、同時に人々と「マクロな文脈」が相互に影響を及ぼしあう接触領域として、私たちの生活の中に存在する。

例えば、中野紀和が取り上げた、福岡県北九州市小倉北区の祭礼行事で活躍する男性のライフヒストリー〔中野 1997〕からは、「マクロな文脈」としてのメディアが機能する様子が伺える。論考のなかで対象となった男性は、ドキュメンタリー番組を意識し、自身が番組の中でなぞらえられた「無法松」という架空の人物と自らを対照させながら、自分の人生を「今を生きる無法松」として表現していく。これは門田の指摘する地域共同体を超えた外部システムとの接続によって「日常生活」が位置づけられている姿に他ならない。

こうした指摘から明らかとなることは、現代社会を生きる人々の在り方を読み解く上では、たとえ微細な日常生活を対象とする考察であっても、メディアからの影響は看過できないという点である。冒頭で紹介した事例で登場したAさんは、メディアによって形成された「女将」像と自分が望む働き方のずれに苦しんでいた。中野が描いた男性は「マクロな文脈」であるメディアが提示した物語のなかに自らの生を位置づけようとしたが、Aさんはメディアによって自らの労働を規定されてしまったのである。門田の指摘を踏まえるならば、こうした人々が生き、「マク

口な文脈」との接触のなかで形成されているものが、現在の民俗学の解き明かすべき場となり対象となる。

そこで、以降、冒頭で取り上げた A さんの事例を念頭に置きつつ、旅館の女性の働き方に影響を与えたメディアにおける「女将」像がどのように形成されたのかについて考察を行う。そして、こうした「女将」像と、A さんが目指していた理想のおかみ像を関連づけて論じることで、現代社会の女性の実態に即した在り方を捉えるための新たな視点を提示することを課題とする。

(3) 1980 年代の「女将」像の背景

本稿では旅館で働く「女将」像について取り上げる。近代以降、旅の産業化が進み、メディアでの情報発信を含めた様々な経済的仕掛けによって、旅行体験は規格化された商品として流通する〔須藤 2007〕。旅館の「女将」がメディアに影響されるのは必然だろう。

本稿では、まず、2 章で 1980 年代に登場した「女将」像に注目し、この時期の雑誌記事の分析を通して、今もって続く「女将」像について考察する。続く、3～5 章においては、2 章で明らかにした「女将」像を形成する要素について、雑誌・新聞記事を使用し、その歴史的経緯を論じる。資料として使用するの、1924 年から 2012 年まで発行されていた旅行雑誌『旅』と、1870 年代から 1980 年代にかけて読売新聞・朝日新聞に掲載された新聞記事である⁽²⁾。

1980 年代に注目するのは、この時期に旅行が国民生活に浸透し、現在の旅館の主たる利用層である「家族や友人との小グループでの旅行」が定着した時期と想定されるためである。戦後、経済成長がもたらした発展によって余暇時間が増加し、余暇行動に価値を見出す風潮⁽³⁾が生まれ、中でも観光旅行への志向が高揚していく〔木村 2010〕。1970 年初頭には団体旅行者よりも家族・少数旅行者の割合が高くなり〔白幡 1996〕、旅のスタイルは家族旅行・個人的旅行へと転換した〔中村 2011; 日本交通公社 2004〕。交通全般の飛躍的發展も手伝って、1980 年代に入ると旅行者数は急速に増加する⁽⁴⁾。つまり、1980 年代は戦後から徐々に大衆化してきた旅行が、国民生活に完全に根付いた時代であり、団体旅行から個人旅行への転換が落ち着いた時代でもあった。「女将」像を抽出するにあたって、こうした変化は旅館にも大きな影響を与えたと想定されたため、この時代に注目した。

2. 女将の発見—『旅』連載記事にみる旅館の「女将」像—

1982 年 1 月から翌年 12 月にかけて、旅行情報誌として古い歴史を持つ『旅』⁽⁵⁾にある連載が掲載された。連載の名は「この宿に佳人ありき」、小説家の澤野久雄が全国の旅館に宿泊し、その旅館の「佳人」、すなわち旅館のおかみと交流する情景を描きながら、旅館について紹介するという内容であった。それまで『旅』に旅館の「女将」をテーマとした記事が掲載されることはなく、この連載が初の「女将」特集であった。

連載中の「女将」に関する記述・写真の解説文・写真等について整理すると、登場する「女将」は特定の女性像を想定していることが分かる。①采配する芯の強さ・意志の強さを持つ、②細やかな配慮・気配りをする、③日本の伝統文化に素養があるという 3 つの要素を持つ女性である。

まず、①采配する芯の強さ、意志の強さを持つ女性が登場するのが、第 3 回、第 9 回、第 18 回、第 23 回である。彼女たちは家族に先立たれる等の事情により旅館経営を背負わざるを得ず、

その困難を乗り越えた女性として登場する。第18回では姑の逝去をきっかけに旅館で働くことになった女性が登場するが、彼女を澤野は「京女は気性が強い」と評価し、予想外のことに忍従する芯の強さを強調する。第3回の女将については「大きな宿に君臨する女帝という趣がある。柄は小さいが剛毅な人である」と述べられ、第23回では「鉄火肌のところもあるのだろう…（略）…この人は板長と喧嘩をして、料理を作り直せ、そんなことは出来ない、と激しい口論となった」というエピソードを書いている。いずれの記事も、女将として従業員を指揮し、旅館を采配する強い女性像を描いているのである。

次に、②細やかな配慮・気配りをする女性であるが、通算7回にわたって記事中に「心配り」、「気配り」、「もてなし」等の言葉が登場する。例えば、館内の装飾に気を配る様子が描かれる第7回、客室内に備えつけられた針箱から女将の細やかさを感じる第10回では、女将の行う気配りについて言及されている。②の描写で特徴的なのが、女性たちを紹介する顔写真のキャプションの中に記述が登場する点である。第7回「そのもてなしは経験3年とは思えない」、第10回「その細やかな目配りは、宿の隅々までいきわたっている」、第11回「本ものの良さをお客様にと心を配る女将」、第15回「独特の金沢言葉と柔らかな物腰でお客をもてなす」、第20回「若さに似合わぬ行き届いた気配りをみせる女将」、第22回「その目配りは宿の隅から隅まで行き届いている」といった解説文が、女性たちの笑顔の写真の横に掲載されている。これらの文章は、読者に彼女たちを「細やかな配慮でもてなす人」として印象付けている。

最後に、③日本の伝統文化に素養がある女性である。記事内で女将たちは日本の芸事、例えば茶道、華道、日本舞踊、書道、謡曲等に堪能であることが強調されている。こうした芸事は旅館での接遇と深く結びつけられ、全23回中、8回も登場する。第1回、第24回では、女将が館内に飾る花を活けている様子が描かれており、女将の「大切な仕事」として紹介されていた。他にも、第2回では茶の湯と、第8回では書道と女将が結び付けられている。また、彼女たちの身のこなしや振る舞いに、芸事への教養の深さを見る記述も多い。第4回は「きびきびした身のこなし」、第6回は「立居がそれとなく折り目正しい」、第7回は「端麗な身のこなし」と称えられているが、このような振る舞いを可能とする理由として挙げられているのが日本舞踊や茶道である。

上記のような「女将」像の存在は、観光学分野においても指摘されている。大久保あかねは、1980年代以降のメディアで、和服を着こなし、華道や書道などの日本の古典的な教養を身に付けて、旅館内で忙しく働く女将〔大久保2003a; 2003b〕が頻繁に登場することを指摘する⁽⁶⁾。

それでは、これらの要素はいったいどのようにして、1970年代後半から1980年代にかけて「女将」へと流れ込んでいったのであろうか。以下では、それぞれの要素が「女将」以前に属していた主体／役割と、どのような変化を経て「女将」に統合されていったのかを論じていきたい。

3. 采配する芯の強さ・意志の強さを持つ女性—戦う「女将」はどこから来たのか—

(1) 奮闘する「女将軍」「女大将」

「この宿に佳人ありき」では、「おかみ」と「女将」という2種類の表記が登場する。そもそも「おかみ」「女将」はどういった意味を持つ言葉なのか。『日本国語大辞典』には「女将」として料理屋、茶屋の女主人という意味が記載されるが、本来この言葉は「ぢ（じ）よししょう」と読む語で、『大

表 1 新聞紙面における「女将」の使用について

A（女将の表記の変遷、読売新聞）

年代	女将			女将軍 女大將 女丈夫	女房 内儀	個人名 のみ	その他	総数
	ぢょしょう	おかみ	なし					
1870	0	0	0	1	10	7	8	27
1880	0	0	0	1	2	6	4	13
1890	24	1	3	0	4	1	7	46
1900	42	28	2	0	1	0	2	75
1910	36	22	8	1	0	0	0	67
1920	25	10	37	1	0	0	0	74
1930	4	2	80	0	0	0	0	86
1940	0	0	16	1	0	0	0	17
1950	0	6	47	0	0	1	0	55
1960	0	1	12	3	0	0	0	17
1970	0	3	8	13	0	0	0	25
1980	0	2	9	10	0	0	0	21

B（女将の職種の変遷、読売新聞）

年代	待合 貸座敷	芸妓屋 芸者屋	茶屋	置屋	料理屋	宿 旅人宿	下宿	その他	総数
1870	2	0	0	0	0	0	0	1	3
1890	7	3	5	0	7	1	0	3	26
1900	24	19	2	2	13	3	3	3	69
1910	17	20	5	0	14	1	1	1	59
1920	15	6	0	1	25	5	2	4	58
1930	18	7	1	0	39	6	2	2	75
1940	2	0	0	0	7	2	1	0	12
1950	1	1	0	2	39	8	0	0	51
1960	1	0	0	1	8	0	0	1	11
1970	0	0	1	0	16	5	0	2	24
1980	0	0	2	1	12	4	0	1	20

C（女将の表記の変遷、朝日新聞）

年代	女将			女将軍 女大將 女丈夫	女房 内儀	個人名 のみ	その他	総数
	ぢょしょう	おかみ	なし					
1870	0	0	0	2	0	0	0	2
1880	0	0	0	2	0	2	0	4
1890	69	32	0	9	2	0	0	112
1900	107	16	3	0	0	1	1	128
1910	37	18	0	3	0	11	0	69
1920	34	31	37	1	0	0	0	103
1930	0	1	65	0	0	0	0	66
1940	0	0	12	0	0	0	0	12
1950	0	0	40	0	0	0	2	42
1960	0	0	10	1	0	0	0	11
1970	0	0	10	0	0	0	0	10
1980	0	4	5	1	0	0	0	10

D（女将の職種の変遷、朝日新聞）

年代	待合 貸座敷	芸妓屋 芸者屋	茶屋	置屋	料理屋	宿 旅人宿	下宿	その他	総数
1890	53	15	6	0	13	1	0	2	90
1900	38	20	7	0	33	7	0	2	107
1910	7	19	3	0	11	5	0	0	45
1920	37	8	2	0	33	14	2	5	101
1930	19	3	1	0	33	5	0	3	64
1940	1	0	0	0	4	1	0	0	6
1950	0	1	0	0	33	2	0	1	37
1960	0	0	0	0	8	2	0	0	10
1970	0	1	0	0	9	0	0	0	10
1980	0	0	0	0	4	1	0	2	7



※同年代のデータの数の多寡を濃淡で示した。

字源』によればその意味は「女の将軍」⁽⁷⁾である。本章では、この語の変遷を明らかにするため、明治～昭和期の新聞記事でどういう女性が「女将」として表記されているか分析する。

明治から昭和にかけて紙面のなかに「女将」が登場する記事は、読売新聞で 574 件、朝日新聞で 592 件であった。表 A・C は読売新聞・朝日新聞における女将の表記の仕方を分類した一覧表、表 B・D は両紙における「女将」と表記されている女性の職種についての一覧表である。総数が異なるので単純に数で比較することは難しいが、同年代のデータと比較し、その多寡を色の濃淡で示した。この表から、表記・業種ともに読売新聞、朝日新聞の傾向はほぼ同じであることが分かる。

1870 年代後半から 1890 年代前半にかけての時期は、後に「女将」と称される貸座敷・飲み屋等を切り盛りする女性たちも、「女房」「後家」「個人名」と表記されることが多い。「女主人」^{おんなあるじ}「主人」と表記されている例も散見される。「女将」の語が使用される前段階として考えられるのは、「女将軍」^{じょしょうぐん}「女丈夫」^{おんなじょうぶ}「女大將」^{おんなだいしょう}という表記で、1880 年代から 1890 年代にかけて登場する。1893 年 4 月 17 日の記事で「女将」^{ぢょしょう}が初登場した後は、「女将」「女将軍」が混在する期間が続くが、徐々に「女将」の使用回数が増えていき、1890 年代後半には「女将」の語が定着している。

紙面に「女将」の語が登場し始めた時期は、「女将」は「ぢ（じ）ょしょう」と読まれていた。初めて「女将」に「おかみ」とルビがふられたのは朝日新聞は 1895 年、読売新聞は 1896 年の記事であった。「女将」が定着するのにあわせて、「おかみ」というルビが相対的に増加していく。ただ、同一の女将に関する話題でも日によってルビが異なる記事や、同じ記事の中に「ぢょしょう」と「おかみ」が混在している記事も散見され、まだ「女将」をおかみと読むことが定着していないことが分かる。

「女将」の職種については、「料亭」「待合」「茶屋」「芸妓屋」の女性たちに使用される頻度が高く、もっとも登場回数が多いのは「貸座敷」「待合」の女将である。記事中には、娼妓・芸妓

をしていた女性が落籍され、パトロンの援助を受け待合や芸妓屋・料理屋などを開業する話が多く登場する。「女将」は主に花柳界の女性を表す言葉として使用されていたことが分かる。

新聞記事から離れるが、小説家の斎藤緑雨は1897年に「おかみと呼ぶは待合の女将よりはじまりて、出所ある事なり。今の小説家のそれとも知らず堅気の内儀は勿論、下宿屋の女房にまでこれを用ふるは不穿鑿も亦甚だしからずや」と述べている〔斎藤 1966（1897）：281〕。この記述からは、この時期はあくまで待合の女性こそが「女将」と考えられていたことが分かる⁽⁸⁾。

紙面ではしばしば女将の気風の良さ・傑物ぶりが取り上げられる。例えば、ある女将は困窮する夫の姿を不憫に思い、生活できるよう店を持たせてやったという（1895年5月11日読売新聞）。その他にも、「元来男優りの女にて強を挫き弱を助くる一種の侠客肌あり」と評され、水兵たちの生活の面倒を見ていた女将（1908年6月19日朝日新聞）や、「現政界の凡有る名士殊に故伊藤桂両公や山県、松方、井上等の元老などの鼻頂を受けどんな不機嫌の時でも其の一言でケロリと直るほどの手腕を持っていた」と評される女将（1915年4月18日朝日新聞）が登場している。彼女たちは、自分の商売のため、客や商売相手と渡り合う商売人である一方、人情に厚く義侠心に富んだ人物として描かれている。こうした気風の良さが待合・茶屋の得意客である政治家や経済人・貴族等にも愛され、名声を高めていた。まさに「女大将」「女將軍」「女将」という言葉に相応しい働きぶりであった。

（2）拡大・定着する「女将」

表記の仕方に注目すると、1920年代前半から、読み仮名を振らない「女将」が登場する。1920年代中頃にはルビがない表記がめだって増加し、1930年代には、大多数の記事がルビなしの「女将」を使用している。この時期に「女将」を「おかみ」と呼ぶことが定着したものと考えられる。

また、1930年過ぎになると、見出しにだけ「女将」を使用する例が登場する。この傾向は次第に強くなり、1950年代以降は多くの記事で「女将」を見出しにのみ使用するようになる。本文の要点を簡潔に表現する必要がある見出しに「女将」が使用されるということは、この語が一般に「客商売を取り仕切る女主人」を想起させる語として普及していたことを反映しているだろう。しかし、1970年以降になると、今度は記事によっては「主婦」「経営者」等の語を使用し、「女将」の語を全く使用しない記事が登場する。1975年代も半ばを過ぎると、読売新聞においては、平仮名で「おかみ」と表記されることも増え、「女将」という語の使用頻度が減少していく。

業種をみると、1920年中期前後から多様となり、新しく「温泉旅館」「洋食店」「カフェ」「食堂」「汁粉屋」等の女性が「女将」として登場する。1930年を過ぎるとこの傾向はますます強くなる一方で、1940年を過ぎると、それまで多く見られた「待合」は減少していく。最後に「待合」の語が見られる記事は1949年、「貸席」の語が見られる記事は1963年である。1950年以降、「女将」は「飲食店」の女主人の意味で使用されている例が大多数となる。待合や芸妓屋の「女将」から客商売に携わる女性にまで範囲は広がったが、待合や芸妓屋数の減少により、結果として飲食店の女主人＝「女将」となっていった。内容も、1900年代初頭に見られたような、「女将」の逸話を紹介する記事は見られなくなり、事件性が高い記事に登場するのみへとになっていく。

（3）新聞記事における旅館の「女将」

前項までは新聞記事における「女将」の用例を整理してきた。表B・Dを見ればわかるように

宿や旅館の女性を「女将」と表記する例は読売新聞では計25件、朝日新聞では計38件と少ない⁽⁹⁾。

戦前の旅館に関する記事において、多く取り上げられているのは、旅館の「女将」と政治家、華族、文化人等の地位が高い人々と旅館の逸話⁽¹⁰⁾である。記事中で旅館を紹介する際に使用される「××男爵定宿」「〇〇伯爵定宿」等の言葉から分かるとおり、こうした人々は特定の旅館を「定宿」⁽¹¹⁾とし、食事兼遊興兼宿泊の場として利用していた。戦後になると著名人との逸話的な記事は見られなくなり、事件に女将や自身の旅館が関係する場合に登場することが多くなる。それが、1970年代を過ぎると女将個人に着目する記事がみられるようになる。「木枯らしの街で おかみの激励なかったら」（1976年12月20日読売新聞）、「現代おんな風土記 旅館のおかみさん30年」（1980年2月17日読売新聞）といった記事がそれである。いずれの記事も、旅館で働く「女将」に焦点をあて、その働きぶりについて特集したものであった。

以上、本章では新聞記事における「女将」の用例を整理した。この語は明治時代以降、本来の「女の将軍」という意味を離れ、女所帯で商売を営む（花柳界出身の）待合・茶屋の女性という意味で使用されてきた。時代が下ると、類似した職業の女性にも使用されるようになるが、「女将」のなかには、「女将軍」「女大将」のイメージを継承した「商売相手や得意先と渡り合い商売を切り盛りしていく女性像」が残されていた。新聞記事に登場する旅館に関する記事を見ると、地位の高い人は決まった宿を食事・遊興・宿泊の場としていたことが伺える。こうした旅館は、「女将」がいた料亭や茶屋と性格が近似していたため、一層「女将」の語が馴染みやすかったと考える。

4. 細やかな配慮・気配りをする女性―「家庭的親切」から「細やかな気配り」への転遷―

（1）接遇の要は女中

現在、「女将」は「もてなし」の実践者・管理者とされるが、旅館黎明期から一貫して接客管理を担当していたかというところではない。明治大正期に執筆された紀行文には、頻繁に宿屋の「下女」「婢女」が客の世話をしている情景が描写されている。彼女たちは所謂「女中」、現在では「仲居」と呼ばれる、利用客の世話をを行う女性たちである。「旅館の女中」は大正期には女性の仕事として定着していた。近代以降、女性の労働が職業としてみなされるようになり、その心得をまとめた職業案内が刊行されるが[三好2000]、そのなかにも旅館の女中が挙げられている。

例えば『文化的婦人の職業』（1924年）には「旅館の女中」が紹介され、『現代婦人職業案内』（1926年）でも「旅館料理店女中」が「お客をそらさずに上手に扱わなければならない、また誘惑も多いので、しっかりした所謂酸いも甘いも噛み分けた、相当年配の人でなければ、よくできない仕事です」と述べられている[三好2003]。旅館の接遇は「下女」「婢女」から「女中」という職業へ、そして1980年代以降には「女将」へ手渡されたのである。本節では、接遇担当者の変遷に注目しつつ、現在、強調される「気配り」「心遣い」「もてなし」がどのような背景を持つのかについて明らかにする。

「宿屋研究」は、1925年3月から12月にかけて全11回にわたり、『旅』に掲載されていた連載記事である。連載をとおして旅客120名・旅館51軒が互いへの希望や要望について意見を述べるというものであり、そのころの宿屋に何が求められていたかが伺える内容である。

旅客からの意見を見ると、家族や知人と接するような親切を求める声が多く寄せられている。

というのも、この時期の宿屋では宿泊料金が明示されることが少なく、宿屋側が客を見て部屋や提供する料理を決めるのが通常であったからである。そのため、上等な身なりの客には接遇が丁寧になり、粗末な身なりの客はぞんざいな扱いになるという傾向があった。こうした態度は、宿泊客に「職業的な冷たさが嫌です」（第1回）、「家庭的でなさすぎる、商売気がありすぎる」（第2回）と不快な印象を与えるものであった。客側が望むのは、利益に左右されない「非打算的な待遇」（第10回）、「心からの親切」（第9回）、「家族的親切味」（第6回）であり、「自分の家に居るとあまり大差の無い気分」（第4回）、「自分の家の離れにでもいるような心地」（第6回）を味わえるような接遇が求められていた。

こうした待遇を期待されていたのは、「宿屋は第一に女中の気の利いたのがいればいいと思います」（第1回）という言葉からも分かるように、女中であった。「良い旅館」の条件について論じた「旅館の研究」（1928年1月号）では、最も重要な「待遇」は「その八分迄は女中の如何によるのである」と述べられ、「お客と旅館」（1938年2月～10月）では「10年の知己のように打ち解けた態度を客にとり、目に見えない親身や商売っ気のない親切心をもって対応すること」がその心構えとされた。客と接する時間が長い女中の態度は、旅館の印象を決定づけるものであった。

その一方で、評価されない女中も存在した。それが「ふしだらで無作法で汚らしい女中」（第2回）である。女中の中には、客と交渉し売春行為に及ぶ女性もいたようで、「旅館への不平」（1926年）ではある地方の旅館が「殊に女中の風紀が乱れていることに驚いた」と筆者が述べている⁽¹²⁾。こうした行為は客から持ち掛ける場合も多かったようで、「宿屋研究」に掲載された旅館から客への要望には繰り返し「女中に性的な悪戯や淫らなことを仕掛けるのはやめてほしい」という意見が寄せられている。

また、芸者を呼んで酒宴を楽しむことも多く、「宿屋研究」では隣室の騒音を訴える意見が多数あった。「酒宴・芸者の嬌声・女中が走り回る音・醜業婦の叫び声」（1938年「お客と宿屋」）に悩まされるのも、この時代の旅館の側面であった。不運な客は隣の宿泊客が騒ぐ声を聞きながら眠れない夜を過ごすしかなく、「無聊時間、花柳の巷に耽溺するは家庭にいる婦人の想像以上」（1925年「宿屋についての感想」）が現実であった。

こうしてみると、客たちの「家庭的・家族的」な雰囲気の中で過ごしたいという希望がいかに難しい問題であったかが看取される。この時代の旅館は男性の楽しみのための空間という性格も併せ持っており、「家庭的な雰囲気」を得ることは難しかったのである。そこで働く女中に淫猥な視線を向ける客が多かったのも頷けるし、その視線に応えた女中がいたのも道理であろう。

（2）おかみの不在

女中とは対照的に、「宿屋研究」にほとんど登場しないのが女将である。女将に言及したのは120名中3名であり、主人や女中、番頭と併記されての登場であった。「主人や女将が不親切なのが不快」（第5回）、「泊まりつけの親切な宿屋では良く徹底（主人主婦の親切心が）してしまして、それは女中さんが心から歓待してくれます」（第5回）、「主人か主婦か番頭か女中頭か、とにかく一人の二つ目が館の内外をすみずみまで見ておかねばならない」（第8回）という3例である。しかも、このうち2例は、「おかみ」「女将」ではなく「主婦」という語を使用している。

しかし、旅館営業に女将は不在であったのかというと、そうではない。1925年1月・2月に掲載された「宿屋についての感想」では総勢65名の宿泊の思い出が掲載され、うち6名が宿屋に

宿泊した際に「おかみ」に接遇された感想を寄せている。なかには女将の「如才ないもてなし」がいまだ記憶に残っていると書いた人もいた。ただ、その他5名によって記された女将の仕事ぶりは、食事の配膳や館内の掃除、衣類の洗濯、見送り等の女中や番頭にも代替可能なものであり、この時期、旅館の「おかみ」の仕事として旅館内に確立していたり、また一般に想起されたりする業務もなかったことが分かる。それぞれの旅館の状況に応じて旅館の女将は働いていたと考えられる。

（3）女中へのまなざしの変化―「可哀想」な女中―

戦前の享樂的な旅の姿は、戦時体制にむかうにつれ嫌悪されるようになり、不要な贅沢をつつしみ、愛国精神や強靱な肉体を作ことを目的とした「正しい旅」が奨励されていく。戦時体制に協力するため1943年8月から『旅』は休刊となり、敗戦の後、1946年11月に復刊した。

1950～1960年代に入っても旅館の主人公は女中であつたが、戦前と違い、「劣悪な労働環境に苦しむ不幸な境遇の女性」として取り上げられるようになった。連載「総合研究 日本旅館」（1959年）では、女中の労働環境を「食事は麦飯とおしんこだけ、足りなければ客の食べ残しを食い、夜具は二人に一組しかない」と報告している。環境が改善されない理由を、女中が旅館内で従属的な立場にある点に見た識者は多かったようで、誌面では女中は客や主人と対等であるという指摘が繰り返し主張されていた。

また、旅館の女中たちは「水商売に従事する女性」として見なされ、夫と離婚・死別した女性等、経済的に困窮している女性等が「やむにやまれず」女中として働くという見方が一般的となっていく。1962年「熱海の女中さんの生態をみる」では、田舎では旅館の女中は「墮落した」職業と思われるため、自分が働き始める際にも家族に大反対されたエピソードを語る女中が登場する。

そうした状況下で、それまで公然と行われていた、女中を性的な視線で眺めことを戒める意見も提出されている。「もともと女中さんをからかって、あわよくば今晚…、それが旅館のウマ味なんだよ、なんて考え方が古臭い」（1966年「旅館楽屋ばなし」）や、「エロ話は慎むこと」（1966年「支配人が教える「泊まり上手」と「嫌われる客」」）などの記述がそれである。女中を性的対象としてみなすことのみならず、性的な軽口や冗談を言うことさえ窘められていることは、戦前の状況と比較すると隔世の感がある。

（4）求められる「細やかな心配り」

女中へのまなざしが転換するとともに、期待される接遇も変化していった。当時の女中は、客室への案内、浴衣への着替えから衣類の洗濯、風呂の世話、料理の給仕に酒の酌と、客の世話を一手に引き受けていた。しかし、1960年代からは「一対一のつききりで、まるで家庭の女房の延長のような」接遇を時代錯誤とする意見が増えていく。

先述した「可哀想な女中」を強調する記事においても、こうした接遇方法は批判的に描かれている。同様の意見は旅館側からも提出されており、1961年の旅館経営者による座談会（「旅館経営者も洗脳時代!？」）では、参加者が「お客さんにゆかたと丹前をみてあげて、ヒモをうしろから回してあげるといふようなサービスの時代じゃないと思うのです」と述べている。この意見⁽¹³⁾から伺えるのは、女中に身の回りの世話をなんでもやってもらおうという接遇に対する嫌悪感である。

では、こういった接遇が求められるようになったのか。この時期に良いとされているのは、「浴衣や足袋のサイズを目算しさと差し出す」、「お客さん同士の関係を察して呼び方に注意する」（1962年「熱海の中女さんの生態をみる」）ことができる女中であった。つまり、千篇一律では対応できない部分を先んじて提供していくことが良いとされているのである。こうした接遇は、「紋切型ではない、かゆいところに手が届くようなサービス」（1959年「総合研究 日本旅館 第8回」）と称賛され、新しい理想的な接遇として誌面で提示されていく。

この傾向は、1966年1月から10月にかけて連載された、女中へのインタビュー記事「女中さんナンバーワン」にも見られる。連載に登場するのは、戦後直後の「可哀想な女中」ではなく、明るく気さくな女中が、仕事に誇りを持ち澁刺と働く姿であった。注目すべきは、女中たちが「心配りの細かさ」（第1回）、「客さんの身になって考える」（第2回・第4回）、「お客さんにどうやって楽しんで過ごしてもらう」（第5回・第7回）ことを重要視し、利用客の希望に合わせることで喜んでもらうことを働く上での大きな喜びだと語っている点である。こうした心構えは、2章で提示した「細やかな心配りをする」おかみ像に酷似している。

接遇の転換をもたらした一因と考えられるのが、女性客の増加である。1960年以降、例えば、「日本旅館よもっと女性を優遇してネ」（1960年）、「女性と温泉 宿屋さん丹前が不潔すぎます」（1963年）、「女性が聞きたい10の質問」（1963年）等、女性に関する特集が増加する。それまでの期間に女性の旅に関する記事が数件しか掲載されなかったことを鑑みると、いかに集中的に取り上げられたかが看取できるだろう。

では、なぜ女性客の増加が接遇の転換をもたらしたのか。記事からは女性客がそれまでのような「手とり足とり」の接遇は不要と考える一方で、その質については細かく見ていたことが読み取れる。例えば、「日本旅館よもっと女性を優遇してネ」（1960年）では、座談会の参加者たちが、女中の過剰な世話は不要と語る一方で、浴衣の丹前の清潔感について不平を述べているし、「女性客は感受性が強い」（1961年）では、女性の執筆者がお茶の温度、浴衣や茶卓の清潔感、客室の清掃、従業員の言葉づかい等が良くないと旅の楽しみも半減すると述べている。

こうした女性の厳しいまなざしを旅館側も意識していたようで、「旅館経営者も洗脳時代!？」（1961年）では、「御婦人方には気を使いますな。サービスの面でも細かいですから」と旅館主が語っている。こうした記事から、女性客の増加に伴い、旅館側が接遇に関して劇的な転換を迫られたことであろうとを想像するのは難くない。

戦前・終戦直後の旅館の利用客は男性が多く女性は少なかった。旅館は男性のための「遊興の場」であり「旅先での家庭」として機能していた。接遇は「男性のための接遇」が中心で、女中は「母親」・「妻」のように身の世話をしつつ「遊興の相手」としても存在していた。しかし、戦後、旅行という娯楽が一般的になると、旅館は「みんなのための空間」へと変化する。利用客層が拡大したことに伴い、それまでの接遇は実情に合わなくなったのである。そのなかでも特に、新たに旅行を楽しむようになった女性利用客の厳しい目にさらされた結果、旅館側は施設管理や接遇にきめ細やかな配慮を迫られることとなった。

このように、戦後、旅館に要求される接遇は「家庭的な接遇」から「細やかな気配り」へと変化してきたが、当初、その担い手として期待されたのは女中であった。それが1980年代に女将にバトンタッチをされたのは、こういった背景からであろうか。「女将」像の最後の要素、③日本の伝統文化に素養がある女性について検討し、この点を明らかにしたいと思う。

5. 日本の伝統文化に素養のある女性―「日本の女」がもてなすという演出―

（1）「日本」的なものの演出―もてなしと伝統文化の旅館―

最初に、「細やかな気配りをする女性」像が登場した時期に旅館が置かれていた状況について整理したい。1960年代の高度成長期は、余暇消費が大幅な伸びを見せた時代として知られている。山村高淑は、戦後、流行した団体旅行の背景には、余暇消費の増大と観光旅行の普及があることを指摘している〔山村 2011〕。交通網の整備も旅の大衆化を後押しした⁽¹⁴⁾。この時期の誌面を見ると、旅行が大衆に定着し、宿泊方法や施設の選択肢が増加したことが明らかである。

1960年代から1970年代にかけて、様々な宿泊施設について特集が組まれるようになる⁽¹⁵⁾。観光産業の発展は、宿泊産業の競争激化をもたらし、旅行客の希望に合わせて宿泊先も選択できるようになった。1960年代には、例えば「ホテルと旅館 5つの違い」（1963年）、「特集 日本旅館 30の知識 これからの旅館はどうなるのか」（1966年）、「ホテルという名の日本旅館」（1966年）、「これからの旅館とホテル」（1971年）等の記事のように、ホテルと旅館を対比させその違いについて解説する記事が多くなる。記事中、ホテルと旅館の違いとして、両者の接遇が言及されている。「ホテルと旅館 5つの違い」（1963年）では、ホテルは客から依頼があった際には必ず応えなければならないが、旅館は命じられる前に望まれるサービスを提供するものと書かれている。このように「親切」で「かゆいところに手が届く」対応は、旅館独自のものであると考えられていた。この接遇方法は4章で指摘した女性客の増加によって登場したものに近似している。

宿泊業界の競争の激化に伴い、旅館は他宿泊施設に対抗してセールスポイントを強調する必要がある。その一つが、旅館独自のものとして意識されていた「かいがいしく親切」で「かゆいところに手が届く」接遇であった。この接遇を、和風の設備を活かした「日本的情緒」と合わせてアピールしていくことで、旅館という施設を強く特徴づけようとしたのである。

1980年代に掲載された宿泊施設に関する特集を見ていくと、旅館については「歴史」「文化」「日本」と関連付けられて取り上げられていくことが多い。1983年の「泊ってみたいエコノミーな宿 面白い宿ユニークな旅館大全集」では、テーマ別に全国の旅館を掲載するものであるが、設定されたテーマは「大名の宿」「伝統ある建物」「歴史の舞台」「文人の宿」「趣のある庭園」である。その他、1984年の特集記事では、「甦れ！日本の良い宿」「心で支える老舗の宿」というテーマで掲載されているし、1986年「日本らしさの宿」では、「小京都の老舗の宿」「よき古き時代の面影残す元別邸の宿」というテーマで旅館が紹介されている。

前田勇は、1995年に旅行会社が行ったエッセーコンテストの作品を題材に、旅館に利用客が期待するものについて分析を行い、「伝統的な日本」を旅館の魅力と捉えている作品が多いことを指摘した〔前田 2002〕。具体例として挙げられているエッセーでは、「日常から脱却したい」著者が、旅館の「日本的なもの」を非日常として捉えていることが描かれている。ここで注目したいのが、その「日本的なもの」の内容―和風の環境や料理、温泉、仲居さんの入れてくれるお茶、そして「女将という母親的存在」―である。この時期に高まった、「日本的なもの」の集合体として旅館を位置づける材料の一つが女将であったと考えられる。

（2）日本の芸事にみる非日常性

「この宿に佳人ありき」の最終回（1983年12月）で、澤野は連載を振り返り、取材をした24人の女将たちが「日本の女」であったと述懐している。2章で指摘した3つの性格のうち、もっとも日本らしさを感じさせる要素が、③日本の伝統文化に素養がある女性である。女将が芸事に習熟している様は、利用客に日本の歴史や文化を感じさせるものとして映る。この要素については、この時期に新しく注目されだしたようで、連載以前に日本の芸事と旅館を関連付けるような記事は見られない。

江戸中期から続いていた日本の芸事や稽古事は、明治期には女性の教養や「花嫁修業」として学ばれるようになったが、1970年代に入り欧米由来のピアノ、バレエ、フラワーアレンジメントなどが広がりを見せるようになると、旧来の芸事を習う人は減少し、一般の人には馴染みがないものになっていった〔石川 1979〕。それらと親しむ女将を強調することは、旅館の「非日常性」を演出する一つの方法であったと考えられる。

いつの時代であっても、楽しみとしての旅の原動力は、日常から脱出し非日常を体験することであった。ただ、近代以降、その性質は変容した。交通手段や活版技術の向上等の技術革新により旅が産業化され、旅の非日常は積極的に創りだされるようになった〔須藤 2007〕。宿泊施設の大衆化・多様化の過程で、旅館も、従来の「安全で清潔な宿」という基本機能に加え、付加価値の高い宿泊施設となることが求められたのである〔日本交通公社 2004〕。

当然、旅館にも非日常性を感じさせる仕掛け―大浴場や露天風呂、豪華な料理、美しい調度品―が備え付けられるようになる。芸事を習い、それを接客に生かす「おかみ」は、普段馴染みがない「文化」「教養」を感じさせてくれる人として、旅館の来館者に非日常を感じさせただろう。しかも、この方法は旅館が持つ「日本風施設」という特徴と極めて親和性が高く、芸事の内容も旅館での仕事に潜り込ませやすいものであったため、一層好都合であった。「旅館の女将」の成立は、戦後の観光産業市場の肥大化がもたらした大競争時代のなかを、旅館が生き抜くための戦略であり、1980年代以降、こうした「女将」像がメディアに取り上げられるようになった結果、「女将」像は現代社会の中に息づくことになったのである。

6. おかみと「女将」の接触

最後に、本稿冒頭で取り上げたAさんのおかみ像と、メディアによって形成された「女将」像が、どのように衝突したのかについて、詳しく考察する。

Aさんの旅館がある温泉地は、古くより近隣在郷の人々の湯治場として知られるところであった。戦時中は途絶えていた客足も戻り、1920年代には再びこの地域は湯治場として賑わうこととなった。農繁期の前後や盆正月になると、近隣の農家から長期で滞在する湯治客が訪れたが、そうした湯治客を迎える旅館は、収容人数10～20名ほどの小規模なところが多かった。旅館で宿泊客に提供される食事は、各旅館のおかみが作った家庭料理であった。したがって、この温泉地では、各旅館のおかみさんの役割は宿泊客に提供する料理を用意することであり、実際、おかみとして働いていた女性たちもそれこそが自分の仕事だと認識していた。Aさんは、自分の母がおかみとして料理に勤しんでいる姿を見て育ち、母親の用意する料理が「田舎では珍しい」と評

判だったことを誇りに思っていた。だからこそ、彼女は旅館で働くことになった際に、料理の質を高め自分の旅館を繁盛させたいという希望を抱いていたのである。

しかし、高度経済成長期が始まる 1950 年代後半から 1960 年代になると、こうした状況に変化が訪れる。それまで、湯治客が商売相手の中心であったこの地域に、じょじょに観光・遊興目的の宿泊客が増え、毎晩、旅館では宴会が開かれるようになっていったのである。それまでの人員では、毎日の宴会に対応することは難しく、旅館はヤトナと呼ばれる臨時雇いの仲居を呼ぶようになる。また、豪華な料理を用意する必要が生じたことから、板前を雇用するようになる。各旅館が宴会場・内湯を増設したり、客室を改装したりしはじめるのも 1960 年代中頃のことである。A さんが旅館業に従事しはじめたのは、この地域の旅館業が湯治客相手のものから、観光客相手のものへ変わっていく時期であった。

では、彼女が実家の旅館で働き始めた 1960 年代中頃、旅館業全体はいかなる状況であっただろうか。「細うで繁盛記」の放映開始が 1970 年であったことを考えると、彼女が働き始めしばらく経ってから冒頭の出来事が起こったと推察できる。これまで整理してきたように、1960 年代後半から 1970 年代にかけて、宿泊業の激化から旅館の独自性が強調されるようになった。戦後の旅行者層の拡大により、旅館業に対し求められるようになった「細やかな心配り」と、日本風の施設が演出する「日本の情緒」が結び付き、旅館の特徴として打ち出されはじめた時期であった。つまり、旅館業全体から見ても、「女将」像が旅館の中に胚胎し、旅館のおかみが少しずつ「女将」へと転換していく過渡期に、A さんは旅館で働き始めたのである。

板前とともに調理場で働く彼女を、従業員達は「裏で働いている人（調理場で働く話者を指す）」には、表で働いている人の気持ちなんか分からないし、旅館の営業について知らないも同然、「お客さんと顔をあわさないおかみなんておかみじゃない」と非難した。また、宿泊客からは「このおかみさんは顔を見せてくれないのか、もてなしてくれないのか」、「おかみさんの顔を見ないと旅館に来た気がしない」という意見が寄せられていることを、女中たちは言いつのった。

この時の経験を「そうしたムラジュウトも必要な時はあるかもしれないけど……」と A さんは言いながら、「細うで繁盛記のおかみさんとは違う方法でお客様をもてなそうとしていたのに、そうした気持ちを、誰にも受け取ってもらえなかった」と嘆いていた。地域内で共有される習わしや慣習などを皆に教え伝えるはずの「ムラジュウト」たちが、メディアが形成した表象を A さんに押し付け、そのように働くことを求めたのである。

そして、宿泊客も、この地域で育まれたおかみの「もてなし」を理解し楽しむことはしなかった。彼らにとって、メディアに影響を受け、自らのなかに形成された「もてなし」こそが旅館の「もてなし」であり、それを提供する人こそが「女将」であったのである。このように、1980 年代に成熟をみた「女将」像は、客・従業員をとおし、家・地域社会の外部から彼女たちのもとに届けられ、その仕事を規定する力を持ったのであった。

A さんの事例は、その地域で行われてきた旅館業の形態が、観光産業や旅館業の変動という「マクロな文脈」の一つに伴い、移り変わっていく時期でもあった。こうした背景があったために、メディアに形成された「女将」が、より地域の旅館業のなかに流れ込みやすく、A さんの働き方は周囲から規定されやすい状況にあったと考えられる。

しかし、その一方でこうした見方もできる。彼女もまた、従業員や宿泊客と同様、メディアにおける「女将」を強調する変動の渦中で働いていたわけであり、自分たちが「女将」として表舞台に押し出されていく力を感じていたはずである。そうした状況下において、メディアにおけ

る「女将」像を彼女自身が自分の役割として内面化し、おかみの理想像として受け取る可能性も等しくあっただろう。だが、彼女の中では時代の要請によるものとして納得されておらず、あくまで従業員や客によって自己の働き方を変更された苦い記憶として残っている。それは、旅館の「女将」像が一方的に押し付けられたもので、彼女が自らの労働の中で発見したあり方ではないためではないだろうか。

以前、著者は旅館で働く女性を対象に、旅館での経験を蓄積させることで、自分なりの仕事を創造する様子を記述した〔後藤 2012〕。この論考には、やはり 1960 年代から 1970 年代にかけての団体旅行全盛期に、旅行者から「団体旅行客の宴会で「女将」として歓迎の挨拶をし、酌の一つでもしてほしい」と頼まれた女性が登場する〔後藤 2012: 182〕。彼女は酔客が騒ぐなかで挨拶することに抵抗があったが、旅行者は大事な仕事相手だったので、その要請を断ることができなかった。ただし、この女性の場合、その後しばらく経ってから、宴会での挨拶を「おかみの仕事ではない」として中止してしまった。

この事例も、「女将」像が形成されていく過程で、旅行者という外部から、もてなす「女将」像を押し付けられたと解することができるが、そうした経験に対する当事者の理解や、その後の対応は異なっている。彼女にとって、この出来事は「旅行者やお客さんがそういうことを盛んに求めた時代であった」と認識され、いったんは、おかみの仕事として受け入れている。しかし、旅館内での立場が確立し、「そうした「時代」じゃなくなった」と言える時期になった途端に引込まれた。当初は団体旅行ブームや旅行者といった「マクロな文脈」によって仕事を規定された彼女が、経験の蓄積を経て、「おかみの仕事」を自分なりに再規定したのである。

以上みてきたように、女性の「おかみ」としての生き方は、必ずしもメディアと女性との直接の関わりだけで一方的に形成されるのではなく、メディアの影響を受けた地域社会や、同業者との関わり等によっても形成される可能性を持つのである。

この2つの事例を踏まえると、本稿で分析した「マクロな文脈」における「女将」像は、個人の働き方を規定する可能性を有したものであったが、それに対しておかみたちがどのように対処するかについては、様々な可能性が開かれていたのであり、「マクロな文脈」と個人の接触領域の様相が単純ではないことが伺える。

おわりに

ここまで、1980 年代に成立したと考えられる「旅館を采配する芯の強さを発揮しながら、細やかな心配りで客をもてなす、日本の伝統文化に素養のある女将」について、旅行雑誌・新聞記事を資料としてその形成要因と成立過程について論じてきた。

そもそも「女将」という言葉は、女の将軍を表す言葉であったが、明治時代以降、待合や芸妓屋・茶屋等の女世帯で商売を営む女性を指すようになり、客商売を営む女性へと拡大されていった。戦前の旅館は男性の遊興場としての機能も持っていたため、男性のための空間ならではの接遇（家庭的接遇）が求められたが、戦後になると、客層の拡大に伴い、みんなの空間へと変質し、接遇の向上と「細やかな心配り」が求められるようになった。

そして、1960 年代以降の観光産業の肥大化・宿泊業界の多様化によって、旅館は苦境に立たされることになる。競争の激化のなか生き残るため、旅館は他宿泊業との差別化をはかる必要が

あった。そこで、1970年代以降主流となっていた個人旅行に合わせ、旅館を寛げる空間でありながらも非日常を感じさせる宿泊施設として成立させるため、「女将」を前面に出す戦略がとられたのである。1980年代から、「女将」の役割が強調され、それまで、各自の事情に合わせ働いてきた女性たちを、一つの「女将」像に収斂させる動きが登場した。現代社会においても息づく「女将」像の形成に、メディアの力は欠かせないものであり、「女将」はまさしく「マクロな文脈」によって創られた女性像であった。

冒頭で取り上げたAさんが対峙していた従業員や宿泊客からの要望の背後には、観光産業の肥大化を契機として「メディア」によって形成された「女将」像が存在していた。それまでその温泉地で育まれてきた旅館のおかみや接遇の在り方を、メディアに沿ったかたちで転換させられてしまった例であったと考えられる。しかし、Aさんにはそうした「女将」像に対し、規定されるだけではない、別の選択肢も残されていたはずであり、メディアにおける「女将」像と旅館で働く女性の間には、様々な関わり方が存在する可能性がある。

本稿では、「女将」像とAさんが持つおかみ像の衝突に焦点をあて、メディアにおける女性像と現実社会における女性の生き方の関わりを論じたが、複雑な「マクロな文脈」と個人の接触領域の様相を捉えるには、十分とは言い難い。今後はさらに、地域社会の歴史や同業者間の関係といった別の位相との関わりをも視野に入れ、より多岐にわたるであろう「女将」像と各おかみの衝突の在り方を取り上げ検討していく必要がある。

従来の研究においては、女性の選択や判断を、家・家族関係・地域社会との関わりの中でなされたものとして捉えることが一般的であった。つまり、女性の行動は、所属する既存の関係によって条件付けられた要因によって決定づけられると考えられてきたのである。したがって、冒頭の事例を、従来の枠組みのなかで考察した場合、旅館という経営体で働く女性が、従業員や客との相互交渉を経験するなかで、経営体内での役割を果たすために判断を下した結果として解釈されるしかなかった。だが近年、民俗学において、社会と女性の関わりについての検討が始まっていることは、本稿冒頭で指摘したとおりである。本稿で示したような女性の在り方が存在する現代社会においては、より広範な「マクロな文脈」も視野に入れるべきであろう。

女性の役割・生き方は、家・地域共同体のみに規定されるわけではない。本稿の結論からは、一人の女性のなかで、家・地域社会・ネットワーク・メディアなど様々な場が重なりあい、相互に関連しあいながら、その生活を形作っていることが明らかとなった。従来の民俗学では、そのなかの家や地域社会における女性という部分を重視してきたが、女性の実態を捉えるためには、この、多層的な在り方のなかで生きる女性の姿に注目する必要があるだろう。

より広範な領域・関係における在り方も、彼女たちの人生の一部なのである。

註

- (1) 関西地方では最高視聴率38パーセントを記録した人気ドラマで、その後も続編・続々編が製作されている。
- (2) 明治～昭和期の新聞記事については、以下のデータベースを使用し資料調査を行った。
読売新聞（ヨミダス歴史館）：<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>
朝日新聞（開蔵Ⅱビジュアル）：<https://database.asahi.com/library2/>
- (3) 国民生活に関する世論調査の結果、生活においてそれまでは物質的な面で生活を豊かにしたいと答える人の割合が、心の豊かさや生活のゆとりが大事と答える人の割合を上回っていたが、

1980年調査の時点で両者は逆転し、以降その差は拡大している〔田村 2013〕。

- (4) 日本交通公社の推計によると、1980年時点では2億5500万人だった旅行者数が、10年後の1990年には3億1200万人に増加している
- (5) 『旅』は1924年から1943年までJTBの前身である日本旅行文化協会から、1946年から2003年まで日本交通公社、後にJTBから、2004年から2012年まで新潮社から刊行された。当初は日本旅行文化協会の機関誌であったが、戦後、旅行に関する様々な企画・特集記事を掲載し、読む旅行情報雑誌としての地位を確立した。
- (6) 大久保によれば、1980年代に入り旅行会社から刊行されたムックと分類される出版物には、『交通公社のMOOK 一流シリーズ①日本の名旅館』（1981年）の「伝統守る宿の女将さん」、『旅のガイドムック select1 日本の旅館100選』（1985年）の「女将の宿」といった特集等のように、「女将」に関する特集が多く組まれている。また、1980年代には旅行番組が盛んに放映されるようになるが、番組内でおかみは、出迎え、客室での料理の解説やマニュアルにない接遇を実行している様子が取り上げられている〔大久保 2003b〕。
- (7) 日本での用例だと、福沢諭吉著の『西洋事情』（1860～1870年）のフランスの歴史に関する記述のなかに「爾後女将の勇義を以て漸く諸城を恢復したれども」という記述がみられる。
- (8) 料理店や待合の女性が世帯主として商売をしていることが多いというのは、一般的な認識であったようだ。「婦人参政結局纏らず本党の選挙法改正協議会」（1924年7月29日朝日新聞）という記事では、参政権を認める範囲について議論する中で提案された、世帯主である婦人にも選挙権を与えるのはどうかという意見に対し「婦人中世帯主に限定すれば宿屋料理や待合の女性は勿論妾にまで之を及ぼすことになる」と反対があったと報じられている。世帯主＝宿屋・料理・待合・妾の女性がその範囲に入ってくるというのがこの頃の認識であった。
- (9) 読売新聞は1920年代まで「旅館のおかみ」の登場は少なかったが、1930年代から戦後に多く登場している。対して、朝日新聞は1930年代までの登場は多いが、戦後の登場は6件のみと減少する。
- (10) 「井上侯の病状「井上の御前は渋い」と馬関の料亭の女将」（1908年9月17日読売新聞）で井上馨と伊藤博文が、1917年1月30日「信楽火鉢物語竹内栖鳳画伯と旅館女将の駆引」で竹内栖鳳・後藤男爵・寺内伯爵が、「京都の五女将聞く者皆凶変を信ぜず」（1909年10月29日朝日新聞）で伊藤博文が、「孫逸仙氏革命の第一人者迎ふる女将の昔語」（1913年1月31日朝日新聞）に孫逸仙が登場する。
- (11) 「御旅館」という言葉も定宿と同じ意味を持つ語として挙げられる。1909年10月29日に報じられた伊藤博文暗殺事件に際しては、伊藤伯の「御旅館」の女将が悲嘆にくれるコメントを寄せている。
- (12) 記事では友人が女中と「妥協」した経験や、女中の誘いを断るのに難儀した経験が披露されている。
- (13) こうした経営者の意見は、昭和30年代後半以降、高度経済成長が促進されたことを背景に、産業全体の雇用量が拡大し深刻な人手不足に陥った〔木村 2010〕ことも理由の一つと考えられる。従業員不足に陥った経営者たちは雇用条件を見直さなければならなかった。
- (14) 1964年には東海道線の東京大阪間が開通、1970年に開催される日本万国博覧会に向けて1968年にはダイヤ改正が図られ在来線の輸送が強化された。
- (15) 1960年・1963年にはユースホステルと国民宿舎について、1968年には国民宿舎と国民休暇村、1975年にはホテルとペンション、1977年・1979年にはペンションの特集が組まれている。

文献

- 石川弘義 1979『余暇の戦後史』東京書籍
- 大久保あかね 2003a「旅館イメージ形成過程におけるメディアの影響」『観光研究』14（2）
- 大久保あかね 2003b「旅館と女将」前田 勇編『21世紀の観光学—展望と課題』学文社
- 大久保あかね 2002「近代における日本旅館の成立と変容」立教大学博士論文
- 門田岳久 2010「『宗教』の資源化・商品化・再日常化—巡礼ツーリズム、及びその地域的展開からみた『生活』論としての宗教研究試論」『国立歴史民俗博物館研究報告』156
- 木村吾郎 2010『旅館業の変遷史論考』福村出版
- 倉石あつ子 1995『柳田国男と女性観—主婦権を中心として』三一書房
- 後藤知美 2012「創られていく労働観—旅館業を中心として」『筑波大学地域研究』33
- 斎藤緑雨 1966（1897）「おぼえ帳」稲垣達郎編『斎藤緑雨集（明治文学全集28）』筑摩書房
- 白幡洋三郎 1996『旅行ノススメ昭和が生んだ庶民の「新文化」』中央公論社
- 須藤 廣 2007「旅と観光」小川伸彦・山 泰幸編『現代文化の社会学入門—テーマと出会う、問いを求める』ミネルヴァ書房
- 谷口陽子 2008「女性の奉公経験と家族および地域共同体における評価—山口県豊北地方の漁業集落矢玉を事例として」『日本民俗学』253
- 田村正紀 2013『旅の根源史—映し出される人間欲望の変遷』千倉書房
- 鶴理恵子 2003「『テマ』から『労働の主体』へ—兼業化と農家女性の自己認識の変化」『日本民俗学』233
- 鶴理恵子 2007『農村女性の社会学—農の元気は女性から』コモンズ
- 中込睦子 1990「民俗学における『主婦』概念の受容と展開」竹田 旦編『民俗学の進展と課題』国書刊行会
- 中村純子 2011「宿泊施設からみた戦後日本の旅の変容—昭和30年代から40年代のホテルを中心に」『戦後日本における旅の大衆化に関する研究（旅の文化研究所研究報告20）』
- 中野紀和 1997「ライフヒストリーからみた都市民俗の生成—小倉祇園太鼓と映画『無法松の一生』の関わりから」『生活学論叢』2
- 日本交通公社編 2004『観光読本』東洋経済新報社
- 日本民俗学会 1994「日本民俗学会第45回年会シンポジウム—民俗社会における『女性像』」『日本民俗学』198
- 福田アジオ 1992『柳田国男の民俗学』吉川弘文館
- 前田 勇 2002「旅館の特徴としての“曖昧性”に関する分析」『立教大学観光学部紀要』4
- 三好信浩 1999「職業案内書にみる女子職業論女性と産業の教育関係史（第6版）」『甲南女子大学研究紀要』36
- 山村高淑 2011「日本における戦後高度経済成長期の団体旅行に関する一考察—「職場旅行」隆盛化の実態とその背景について」『戦後日本における旅の大衆化に関する研究（旅の文化研究所研究報告20）』
- 湯川洋司 2008「村とは何か」『村の暮らし（日本の民俗6）』吉川弘文館